

編集後記

今年梅雨季になつても、好天気がつづく。とくに関東地方は水不足が予想され、過日のわずかな雨に、雨のありがたさを思う人々も多かった。東三河地方でもその思いは強い。東京や大阪の水のまずさを実感するだけに、この思いには一層大きいものがある。雨にしても降るべき時があり、それが乱れた時、その影響はその年をのりこえて波及する。それは自然の原理ではあれ、その原理を認識できるようになつたところに人間の知恵がある。そして、さらにその影響を熟知した上で、それに対処する工夫ができるレベルに到達した時、科学は有効性をもち、その工夫の中に、人間社会のシステムの再編、改編の芽が内包される。

大学という社会も同様ではなからうか。本学が直面している多くの問題は、過去のそれぞれにやるときにやることがやられてこなかつたことに起因しているようにみえる。科学を術とする大学人は、自らの問題となると動きは鈍い。しかし、大学も社会の動きの中で、迎合はしないまでも、孤高を保つことの出来る時代ではなくなつた。今、何をすべきかという認識を欠くと、さらに後世に禍根を残す。禍根を残さぬ工夫も必要だろう。

研究も同様、やるべき時がある。しかし、大学人であれば研究も所詮大学の在り方にかかわる。会議慣れた頭には、純粹な論理の世界はむかない。今、本学がシステムの再編期にあるならば、このさい一気に具体化し、解決を急ぐべきだろう。それにより、やるべき研究のやるべき時期を確保したいと願うのは幻想だろうか。

多忙な中で、思わぬ着想も得られるかもしれない。しかし、点と点で結ばれたその先が見えにくくなつた実感もある。年のせいかもしれない。

第八十五輯をお届けする。研究活動の証である。